

ダブル・バインド理論の生活史分析とその認識論的意義

—ある精神疾患経験者の「語り」から見出される 直線的認識の内発的契機をめぐって—

藤本 美貴ⁱ

1956年に「ダブル・バインド理論」を提唱した G. Bateson は、後年、とりわけ1970年前後より、極めて重要な認識論的議論をより一層強く打ち出すようになる。よく知られるように、それは、相互行為関係を把握する際の「直線的因果律」から「円環的認識」への転換の必要性であり、彼は、旧来の「心的外傷」概念に見られるような一方通行的で単線的な暴力図式から脱却し、双方の振る舞いがお互いを駆り立てあうといった一種のシステムティックな円環構造として把握する必要性を訴えたのであった。個人内部で不断に目指され続けざるを得ない、存在論的な自己規定をめぐる破壊的な再帰的作用にも適用されるべきと考えられるこの「認識論的転換」は、とりわけ後続の家族療法分野に多大な影響をもたらした。だが一方で彼は、そうした認識論的議論を本格的に展開する途上で、ある精神疾患経験者が残した長大な「語り」が紡ぐ生活史への縦断的分析と呼ぶべき、極めて興味深い思索を別途残している。そこでは、先の認識論的転換を真っ向から問い直させるような、直線的認識の内発的契機とその獲得の過程、ならびに円環的システムが打破されていく過程が示されていた。筆者はそれを、Bateson 自身が提示した後年の認識論的議論に対し、批判的かつ発展的意義をもたらすものであったと捉えている。

キーワード：Bateson, ダブル・バインド理論, 心的外傷, 認識論的転換, 存在論, 生活史, ナラティブ・アプローチ, パーシヴァルの語り

すものであったかを明らかにすることにある。

I 背景と問題

本稿の主たる目的は、「ダブル・バインド理論 (Double Bind Theory)」(Bateson et al. [1956] 2000=2000 以下“TTS”と略記)を提唱した G. Bateson がいかなる経験世界へのアプローチを展開していたか、その概要を明らかにしたうえで、さらにそれが、Bateson 自らが後年に提示した認識論的議論に対しいかなる批判的かつ発展的意義をもたら

1-1. 心的外傷理論としての論点と「認識論的転換」

周知のようにダブル・バインド理論は、養育者と子どもの二者関係を基本モデルとし、意識的-言語的水準に属する〈愛情〉メッセージと無意識的-非言語的水準に属する〈敵意〉のメタ・メッセージとが断続的に発せられるという独特の対人関係的外傷状況を明らかにした。本理論は「心的外傷 (psychological trauma)」研究の一環として現在もなお重要な意義を有していると考えられるが、はじめに、藤本 (2013, 2014) に依拠してその着目すべ

i 立命館大学衣笠総合研究機構客員研究員

き論点を整理すると以下のとおりとなる。

まず、(1) 当の外傷状況が「あたかも〔一つ、二つと〕加算可能であるかのように」(Bateson [1969a] 2000: 272=2000: 373 以下〔〕は引用者) 時間的-空間的に限局化できるものではないことが重要である。子どもにとって外傷的なのは、養育者との間の長期に及ぶ「抜き差しならない関係性 (intense relationship)」(TTS 208=296) なのであり、その意味でダブル・バインドとは、時間的-空間的な「シーケンス」として、つまり長期に及ぶ通時的な現象として捉えられなければならない。

そのうえで、(2) 次に着目すべきは、子どもがその「関係性」の意味や本質を自ら解釈し引き受けようとする際の能動的モメントのありようである。養育者が発する〈敵意〉は非言語的なものであるため、子どもはその象徴的記号に対し、自ら能動的に“敵意のメッセージではないか”と解釈せねばならない。しかもこの苦痛を伴う能動的解釈は、甚だ逆説的ながら、もう一方の言語的な〈愛情〉メッセージによって強引かつ継続的に妨げられ続けるため (Bateson 1966: 417)、子どもは一向に“(敵意を向けられるべき) 悪い存在だ”などといった形での自己規定に到達し切れないまま、能動的解釈の過程の中を漂い続けねばならない。こうした宙吊り状態こそが先の時間的-空間的な通時性を支えており、さらに子どもは、この自らの解釈が妥当なものであるかどうかを確かめるべく、後年に至ってもなおその解釈内容に見合う外的状況、つまり、かつての外傷的な関係性を予期させるような状況を、これまた能動的に招き続けざるを得なくなる (TTS 206=294)。

(1) 「(高度な) 抽象性 (abstractness)」と (2) 「自己-確証 (self-validating)」(Bateson 1966: 417) の過程として提示されたこれらの論点は、「長期反復性外傷」や「複雑性 PTSD」で有名な J. L. Herman (1992=1999) 以降の外傷研究にも匹敵するインパクトを持つ。それは、単に外傷体験の長期反復性をいち早く指摘した点に留まらず、状況を安易に限局

化して捉えてきた旧来の「『外傷』という概念では切り切れないある種の知覚経験」(TTS 207=318) を起点とした、子どもの側の内的な自己-確証過程にまで緻密に接近することで、独自の「新たな認識論と存在論 (a new epistemology and ontology)」(Bateson 1971a: 242 以下、下線は引用者) に依拠した外傷理論を打ち立てようとした点に現れている。

Bateson らは、旧来の外傷概念にみられた「直線的因果律 (linear causality)」から、いわゆる「円環的認識 (circular epistemology)」への転換の必要性を説いたのであった。矛盾したメッセージを発する側と、それを知覚し戸惑い自己-確証過程に陥る側との抜き差しならない関係性は、一方通行的な暴力図式、すなわち、後者が示す行為的反応のモメントを一切考慮せず、ただ前者からの行為的働きかけにのみ暴力性とその発現根拠を認めようとする単線的な図式としてではなく、双方の振る舞いがお互いを駆り立てあい、かつそれが相互反応様式として自律的に駆動するかのような一種のシステマティックな円環構造として理解されなければならないという (Bateson 1971a)。

ここで、Bateson においては「認識論」が「存在論」と不可分であり連動するものとして理解されている事実に留意しておく必要がある。彼によると、「生きた人間存在の自然史においては、存在論と認識論は切り離すことができない。[というのも] 世界とはいかなる類のものであるのかといった (一般に無意識的な) 信念は、彼がその世界をどのように捉え、その世界のなかでどのように振る舞うかを決定づけ得るのであり、また [逆に]、彼の知覚と行為のありようが、世界の本質に関する彼の信念を決定づけ得る」(Bateson [1971b] 2000: 314=2000: 427) からであり、人はこうして「半ば自己確証的に働く —— 究極的に正しいか否かは別とした —— 認識論的-存在論的前提の網目 (a net of epistemological and ontological premises)」へと捕われている」(Bateson [1971b] 2000: 314=2000: 427) のだという。この点も加味して言うと、先の

円環的認識は、単に“外的世界とはいかなるものか”という客観的認識（ないし信念）のありようや、そうした認識が言語を介して現れた結果としての外的振る舞いという表層的なレベルに対する客観的観察にのみ適用されるだけでなく、こうした外的世界への認識や表層的な振る舞いのさらに背景を成しそれらを決定付けるような、世界のなかで存在する際のありようとその基本構造、すなわち、「幻聴、妄想、人格の変調（alterations of personality）、健忘など」（TTS 223=313）といった複雑な精神病性症状を伴うほどの、不安定かつ危機的な存在のありようとその個人内部に深く刻み込まれた内的構造——Batesonの表現を使えば内的な存在論的「意味宇宙（universe）」（TTS 206=293）——を理解する際にも適用される。すなわち、ダブル・バインド状況に見出される円環性というのは、個人内部で不断に目指され続けざるを得ない存在論的な自己規定をめぐる、一連の破壊的な再帰的作用にも連動して適用可能と考えられるべきなのである¹⁾。

1-2. 認識論的転換がもたらした影響と異論

長谷正人（1989）は、こうした認識論的転換によるシステム論的な捉え方を、社会システムの一つ独特の病理的秩序形態を明らかにするものと評価した。それは「サイバネティクス」と呼ばれるメカニズムに相当するものであり、双方の振る舞いがお互いを駆り立てあうことによる逸脱増幅的過程（ポジティブ・フィードバック）が一方で展開されつつも、より高次のレベルでは、その空間から逃れられず抜き差しならない関係性を維持せざるを得ないといった逸脱解消的過程（ネガティブ・フィードバック）が支配する多層的システムである。生物の進化と生存過程にも応用可能なこうした説明はBateson（1979=2006）自身も論じているが、しかしそうしたマクロ社会学および生態学的应用もさることながら、やはり着目すべきは、後の「家族療法」分野全体にもたらした影響であろう。L. Hoffman（1981=2006）がいち早く述べたように、1950年代以降の家

族療法の進歩は総じてBatesonの目指していた認識論的転換と軌を一にしており、特定の疾患や苦悩を、従来の外傷論のように特定の他者から発現したものと推測する思考のみならず、当人の無意識的葛藤から発現したものと想定しエネルギー論的に感情の修正体験と徹底操作を促そうとする精神力動モデルもまた、直線的認識の範囲内にあるものとして厳しく排斥すべきと考えられていったのである。

ところがその一方で、浅野智彦（1996）が整理するように、1980年代中頃より、家族療法の内部からBatesonの認識論的議論に対する異論も示され始めた。P. Dell（1989）は、Batesonの言う円環的認識への転換が「権力（power）」という概念を通じた問題理解の可能性を不当になきものにしようと指摘した。つまり、権力関係という観点を保持するのに直線的認識は未だ必要不可欠であり、さらにそれは実際の治療場面におけるセラピストの関わり方を考える際にも必要不可欠であると言うのである。Dell（1986）によると、家族療法においてクライエントの経験は「記述（description）」と「説明（exploration）」の二つの水準で扱われるとしたうえで、現象学的な記述の水準において経験は直線的なものとして追体験されるにもかかわらず、認識論的転換以降では専ら円環的認識に基づく説明というメタ水準において経験は扱われ、さらには、そうした説明的な言語によって経験の記述がなされてしまうといった本末転倒な事態も見受けられるという。とはいえ、日常的にセラピストらは経験の直線的な記述へと避けられず従事するものであり（Dell 1986: 513）、またそもそも「治療的介入」という関係様式自体が、セラピストという固有の特権性ないし権力性に由来した直線的な介入として認識されるべきではないかという立場をDellは堅持しているのである。

セラピストの特権性ないし権力性へのある種の自覚を促す議論は、とりわけ、現今の家族療法を主導する「ナラティブ・アプローチ」へと引き継がれていく。H. Anderson & H. A. Goolishianは、サイバネ

ティクスに依拠するセラピストが治療システムに関する特権的な知を有するものと前提しつつも、あるいは前提とすることによって、自分たちだけは「非階層的な立場をとることができ、セラピストとしての権力の行使を放棄することができる」(Anderson & Goolishian 1990: 160)と考えていると述べ、そうした発想は端的に自己欺瞞であると断罪する。先の Dell に引き付けていうなら、サイバネティクスの理論に依拠する彼らこそまさに、円環的認識に基づくシステム論的な「説明」に従事するあまり、自らの避けがたき権力性を欺瞞的に否定する者たちということになろう。そうした立場に対し Anderson & Goolishian は、治療システムという中にはセラピスト自身も含まれ、かつ、単なる非階層的な立場では済まされないことを強調する。そのうえで、「いわゆるセラピストの権力と専門性の行使の多くは、単純に言語のレトリカルな使用、すなわち、影響を及ぼし説得するための言語の使用へと変容可能である」(Anderson & Goolishian 1990: 161)という立場をとる。いわゆる「社会構成主義」に根差したナラティブ・アプローチの基本認識が、ここに端的に示されていると言えるだろう。

1-3. Bateson への回帰的な問い——ある「語り (Narrative)」へのアプローチをめぐって

セラピストとクライアントとの「協働性」に重点を置く Anderson & Goolishian にとって、システム、あるいは(問題状況を)システムとして把握しようとする際に要請される円環的認識は、個々の問題状況に先立ってあらかじめ用意されるべき絶対的な知などではない。あくまでそれは双方の断続的な会話を通じて、つまり問題について語り合うことを通じて、はじめて社会的に構成されるものであるという (Anderson & Goolishian 1988: 379=2013: 56)。再度 Dell に引き付けて言い換えれば、円環的認識による客観的な説明可能性は、クライアントの主観的経験をめぐる協働的な現象学的記述と解釈に基づいて、はじめて見出されるにすぎないのである。一

方で M. White & D. Epston (1990=2017) は、そうした断続的な会話を通じてクライアントの自己および自己を取り巻く世界が構成されるなかで、これまで自らを支配してきた「ドミナント・ストーリー」の正体を明らかにし、その外側に汲み残された生きられた経験の諸側面へと光を当て、そしてそこから新たな「オルタナティブ・ストーリー」の創生ないし再生を目指すことが、ナラティブ・アプローチの本旨であるとする。浅野 (2001) が言うように、それは語りないし自己物語を通じた現実の(再)構成であると同時に、語りないし自己物語を通じた矛盾の暴露と脱構築のプロセスと言えるだろう。

こうしてセラピストは、不断の言語的介入という振る舞いへと自らの権力性を変容的に行使していく。Anderson & Goolishian (1988: 385=2013: 74) が言うように、セラピストは自らの価値観から完全に中立・解放的とはなり得ず、暗黙の規準に基づいて行為せざるを得ない。重要なのは、セラピストが自らの思想や価値観を会話のなかに反映することで、クライアントの側に「統一された知」(White & Epston 1990: 30=2017: 40)として固定されていたもの、すなわち古いドミナント・ストーリーとそれが有する権力性を相対化する契機をもたらすことである。ただしここで注意すべきは、「知」という表現が使われ、かつ M. Foucault が援用されているように、White & Epston にとっては、そうした古いドミナント・ストーリーの有する権力もまた「構築的なもの」(White & Epston 1990: 19=2017: 27)、すなわち、「知/権力」という形で下から積み上げられ、本人の「人生や人間関係を形作る規範的な『真理』」(White & Epston 1990: 19=2017: 27)として築き上げられた構成物と考えられている点である。ナラティブ・アプローチの治療空間とは、そうした必ずしも強圧的で排他的なばかりではない構築的な知/権力としてのドミナント・ストーリーを「問題」として外在化し、新たな物語を見出していく場であるとともに、そうして新たに見出される物語もまたセラピストの権力性が介在することによる構

成的な知の結晶である以上、「問題」となればいつでも外在化ないし脱構築されうる可能性のあることを、逐一確認すべき場でもあると言えるだろう。O. Sutherland et al. (2013: 379) の言うように、それはセラピストへのスーパーヴィジョンの段階においても重視されるべき、自らが埋め込まれているところの権力関係に対する反省性と気づきが常に要請される場なのである。

ナラティヴ・アプローチの創始者らによって展開された、権力という観点を通じた認識論的立場をめぐる議論は、最後の Sutherland et al. のように、今日においてもなお繰り返し議論や研究がなされている²⁾。しかしながら筆者は、そうした昨今の議論へとつぶさに目を向ける前に、次のような問題意識を抱いてやまない。それは、認識論的転換を主張した当の Bateson 自身のなかに、自らの認識論的議論を根本から問い直すような思索は一切展開されなかったのだろうか、という問題である。確かに彼は、円環的認識への転換の必要性を訴え出した張本人であるが、とりわけそれは1970年前後になってより一層強く打ち出されるようになり、逆にその途上では、たとえば「繰り返されるダブル・バインド的外傷 (double-bind traumata) に支配された個人は、この外傷的コンテクスト (traumatic context) がさも絶えず自らを包囲し続けるかのように行動する、ということが想定されるだろう」(Bateson 1959: 135) とか、「我々は、統合失調症的コミュニケーションが、繰り返される外傷 (continual traumata) の結果として学習され習慣化されたものであるという仮説を調べている最中である」(Bateson [1960] 2000: 245=2000: 342) といったように、——「外傷」という表現が採用されているように——未だ直線的な思考から脱却し切れていない様子が一方で垣間見られるのである。これは裏を返せば、この時期において、今日改めて発掘されるべき何らかの重要な思索がなされていたことを、暗に示唆するものとは考えられないだろうか。

結論を先取りすると、彼はある極めて興味深い思

索をこの時期に展開していた。それは、ある精神疾患経験者が残した長大な「語り (Narrative)」を素材とした、彼にとっては特異とも言える経験世界へのアプローチの記録であった。(マルクス主義) 精神分析学の立場からダブル・バインド理論の経験科学的有用性に言及した A. Lorenzer の言葉を借りるなら、当該人物の「語り」が紡ぐ「生活史の縦断面 (Längsschnitt der Lebensgeschichte)」(Lorenzer 1977: 72) への興味深いアプローチであったと言い換えられる。今日実践されているようなナラティヴ・アプローチとは当然ながら趣旨も内容も全く異なるものの、Bateson はそうした長大な「語り」への縦断的分析を通じて、彼自身が後年、「認識論的誤謬 (epistemological error)」(Bateson [1969b] 2000=2000) と呼び排斥するに至った直線的認識の重要かつ必然的な役割とその一種独特な発生の契機に、図らずも触れていたように考えられるのである。本稿の目的は、まさにその Bateson 自身による思索のなかに内包されていた、後年の自らの認識論的議論を根本から問い直させるような重要な契機とその独自性について明らかにすることにある。

II 『パーシヴァルの語り——ある患者の精神疾患をめぐる物語 1830-1832』をめぐって

1961年、Bateson は John Thomas Perceval (1803-1876) という人物が残した二冊の伝記（第一巻は1838年、第二巻は1840年出版）に着目する。『精神錯乱状態においてある紳士が経験した治療の物語』と題されたこれらの伝記には、当人が精神的不調に苦しんでいた長期に及ぶ社会的および心理的状況が詳細かつ長大に記されている。Bateson はそれらを、自身の精神錯乱経験の内実を明らかにしたいという努力の中で、後年の S. Freud 的意味での無意識的構造を自力で呼び覚まし、さらには神学的言語を通じて、自らの内的な意味宇宙を内的「聖霊 (Holy Ghost)」ないし「全能者 (Almighty)」との葛藤関係から捉えようとしたものとして、高く評価した

(Bateson 1961)。そして第一巻の全体と第二巻の一部をまとめ、『パーシヴァルの語り——ある患者の精神疾患をめぐる物語 1830-1832』として編集・出版することとなった (Bateson (ed.) 1961 なお Perceval 自身の記述からの引用は、以降 *PN* と表記する)。

この伝記に示された経験世界へのアプローチこそが、本稿で取り上げるべき Bateson による生活史の縦断的分析の実践記録であるが、これまで家族療法の専門家はおろか、Bateson に関する種々の学説研究などでも専門的に言及されることはほとんどなかった³⁾。したがって以下ではまず、本書序文内の Bateson による紹介 (1961: v-viii) に依拠しつつ、主人公である John の略歴を整理することから始め、続いて、Bateson によるアプローチの概要を記していきたい。

2-1. John Thomas Perceval の略歴

John は1803年、イギリスの元首相 Spencer Perceval の12人きょうだいの五男として生まれ、十分な富と名声の中で幼少期を過ごした。生活は上品で礼儀正しく、慎み深い規則と習慣の中で、彼は自国の宗教を遵守し崇拝するよう教えられた。

1812年、父 Spencer が突如暗殺される。数日後、議会から家族に対し5万ポンドの補償金が支払われ、生活は裕福な状態を維持することができた。さらに2年後、母が軍人中佐と再婚した。

17歳の時に、7年間を過ごした公立学校を卒業し、翌年、幼少期の頃の憧れから軍に入隊し将校となった。さらに翌年、第一近衛隊へ配置換えとなり、隊長も務めた。だが、規律正しく紳士的な振る舞いの下で育った彼は、軍の攻撃的で不摂生かつ怠惰な環境に驚きを隠せず、自らをその中に引きずり込もうとする者には断固抵抗した。さらにこうした体験は、自身の宗教的信念に対する葛藤をも引き起こした。父 Spencer が極端な反カトリック主義者で預言の聖句を熱心に勉強していたことから、彼も福音主義的教義の影響下にあったものの、信仰をめぐる困惑や

疑問を解消したいと考えるようになった。

1830年初旬、彼は除隊し、オクスフォード大学に入学する。同年6月にはスコットランドへ旅行し、グラスゴウ近くのロウに滞在中、ある過激な福音主義集団の溜まり場を訪ねた。そこで、誠実さをめぐる問題に関心を持ち、宗教的な言葉と熱意で語る彼らの教義に深く心を打たれたものの、難解な言葉を早口でまくし立てる集団のリーダーたちでさえ、John の振る舞いがこの頃から常軌を逸した一貫性なきものに感じられた。

その後、ダブリンに移り、友人らの元を転々とした彼は、一時は精神的回復を感じたものの、数日も経たないうちに活発な精神病性の振る舞いを見せるようになる。そのため、同年12月、友人らは彼を医師の手に委ね、滞在先のホテルのベッドに二週間、縛り付けられることとなった。そして翌年1月、長兄の Spencer が呼ばれ、ブリスリントンにある Fox 医師が運営する精神病院に送られた。John はそこで1832年5月まで収容され、その後、タイスハーストにある Newington 医師の精神病院へと移送された。1834年初頭まで収容されたとみられる。

退院後、同年に結婚、1835年にパリで自伝第一巻を執筆し1838年に出版、1840年に第二巻が出版された。その後は“Alleged Lunatics Friends Society”と呼ばれる組織の特別委員を務めたり、雑誌 *The Times* 宛に精神異常者をめぐる法律を主題とした書簡を寄せたりするなど、不運な人々の困苦を代弁する活動に携わった。

1876年に死去。

2-2. 「幻聴」への接近

狂気の社会史研究で有名な R. Porter (1987=1993) は、John の伝記を、被収容者の立場から精神病院での非人間的扱いについて告発した貴重な書物であり、当時の精神病患者に対する処遇の卑劣さを裏付ける重要な記録と位置付けている。確かに John は、ダブリン滞在時から「監禁」状態に置かれ、ベッドに縛り付けられ、水も満足に飲めない状態であ

った (PN 39-40)。最初の精神病院でも、他の利用者らで一杯の部屋に閉じ込められ、手枷足枷をかけられ、嘲笑に曝されるなど、自尊心の芽を徹底的に叩き潰すような扱いが見られたという (PN 137)。Porter (1987: 180-1=1993: 293-4) の言うように、こうした扱いが John の精神状態をより過酷なものにし、長引かせる元凶となったと見るのは無理のないことであろう。

だが Bateson は、そうした告発のより背後に存する、より深遠な John の「声」の中身に注目する。ただしその「声 (voices)」というのは、ダブルリン滞在時より本格的に彼を悩ませ始めた「幻聴」としてのそれである。

私は、自らが想像するところの聖霊 (Holy Spirit) の命令によって、余事について話をするよう命じられたが、私が〔話をしよう〕試みるたびに、〔その言葉が〕私に向かって与えられる声ではなく、私自身の声から発せられることに対し恐ろしく非難され、苦しめられた。こうした矛盾に満ちた命令が、これまでの私の一貫性なき振る舞いの原因であり、こうした想像が、究極的かつ総体的な錯乱の原因を形作ったのである。というのも、恐ろしいほどの苦悩と苦痛の中で、私は聖霊の怒りを引き起こすことについて、また最悪な恩知らずという罪 (the guilt of the grossest ingratitude) を背負うということについて話をするよう命じられ、と同時に、話をしようとすればいつも、自身に向けて送られた霊的な言葉を使わなかったことに対し、軽蔑的な仕方でも厳しく非難されたのである。(PN 32)

彼を悩ます幻聴が「聖霊」と呼ばれているのは、ロウで目にした福音主義集団が聖霊の指示によって動かされ、話をしているように見受けられたことに端を発する (PN 16)。John はその姿に興奮し熱狂しつつも、話される言葉のトーンはほとんど馬鹿げたものに感じられ (PN 18)、その熱心さが偽りのものかもしれないと感じられた (PN 22)。彼はこれら

の印象を笑い飛ばそうとするが、こうして「恐ろしく忌々しい妄想」(PN 16) にすぎないと疑った事実は消えず、それ以来、「多大なる慈悲と奇跡的恩恵を受けたはずの聖霊に対する … [中略] … 最悪な恩知らずという罪」(PN 24) の観念に苦しみ続けることとなる。さらには、先述のような矛盾した命令形態を伴う幻聴となって、彼を錯乱状態へと導いていく。

2-3. ダブル・バインドとしての幻聴

Bateson は、まさにこの幻聴による矛盾した命令形態にダブル・バインド的性格を見出そうとした。John は、聖霊の存在を疑ってしまったことについて、そしてそれによる自らの「恩知らずさ」について語るよう命じられる。だが、命令通りに自身の言葉で真摯に語ろうとすると、自身に向けて送られたはずの霊的言葉を使わなかったことに対しさらに厳しく非難されてしまう。つまり John は、聖霊の存在およびそこから送られるはずの言葉を疑ったことで聖霊の怒りを買ひ、罪悪感に苛まれたと同時に、その怒りや罪悪感を収めるべく示された可能性を遂行できないことでさらなる非難を受けるといった、一種のダブル・バインド状態にあったと Bateson は考えたのである。

ここでの幻聴は彼を誤ったテーゼへと導いている。つまり、行為の選択可能性は、幻聴が認めうる一つの方向性を彼が選択しうる限りにおいて存在する、というテーゼである。彼は自ら選択し服従しようとするが、いつも、より抽象的なレベルで責められてしまう（たとえば、誠実さ (sincerity) に欠けるといった形で）。彼はこうして、いわゆる「ダブル・バインド」状態に置かれることとなり、正しい行いをしたときでさえも、それを別の誤った理由で行ったとして責められてしまうのである。(Bateson 1961: x)

ロウでの出来事をきっかけに抱えることとなった

「絶望感と恩知らずの感覚」(PN 33)を伴う罪悪感、およびそれによるダブル・バインド的幻聴は、精神病院への収容後、さらに恐ろしく複雑なものとなっていく。とりわけ最初のプリズリントンでの生活は、「愚かな、臆病な、あるいは鈍重な不服従を最後まで続けるかどうか」(PN 60)が本格的に試された場となり、「身の回りの様々な幻聴による理解しがたい命令、禁止、当てこすり、脅迫、嘲り、侮辱、嫌み、そして痛ましい訴えによって引き起こされた激しい精神的苦痛で、いつもいっばいだった」(PN 60)。その命令は、時に身体的安全を脅かすほどの行為を求めるものであり(PN 115)、枕に顔を押し付け窒息したり(PN 95)、看護人らを怒らせ自らを叩かせたり首を絞めさせたり(PN 115)といったものであった。別の折には、断崖絶壁を見下ろす屋外の手すりから真っ逆さまに身投げするよう命じられたこともあった(PN 117)。Johnはこうした命令を貫徹することで、自身の宗教上の信仰心(faith)を証明できるという気になったが(PN 117)、結局、完全な自己破壊行為(自殺)にまで至ることはなかった。それは、何らかの悪(evil)が自身の中に引き起こされた際に、即座に救済がなされることを期待したためであったが(PN 115)、結局は命令を貫徹できなかったことによる更なる罪悪感やジレンマに陥ることとなった。

2-4. 精神病院での生活におけるダブル・バインドの再現

Bateson (1961: xii-xiii)は、精神病院での扱いが、その拙劣さと偽善性によって、Johnの内的ダブル・バインド状態を癒すどころか、むしろ模擬的に再現するものになってしまったと分析する。つまりJohnにとっては、家庭的な親密さを持って治療にあたらうとしながらも、実際は身体的拘束や暴力を伴う侮辱的扱いに走るといった、極めて偽善的な振る舞いに感じられてやまなかったのである。

とりわけそうした実感は、最初の精神病院での生活で強く抱かれた。Johnは、運営者であるFox医師

をはじめ、その息子ら、使用人ら、看護人らと接する中で、彼らを自身の家族と何度も重ね合わせようとする。たとえば、ある女性の使用人をLouisaと呼んで実際の妹だと信じ込んだり(PN 103)、Fox医師の息子らを「実直かつ悔恨(に満ちた人物)」「愉快者」などと名づけ、自身の本当の兄弟だと信じ込んだりした(PN 84)。また、Fox医師を父親と呼び神聖な存在だと考えたこともあれば(PN 85)、「額にキスをし、神のご加護がありますようにと言ってくれた」(PN 112)看護人の一人を父親と呼ぶこともあった。別の看護人の妻で、ジャムが塗られたパンを持ってきてくれた人物を自らの母親と考えることもあった(PN 107)。

こうした同一化は元々、父親に容姿の似たある使用人に会った際、聖霊が彼を「死から救い出し、可能であれば我が魂を救う手助けをしてくれる」(PN 62)人物だと告げたため、自身の父親と同一化したことから始まった。聖霊曰く、このように家族が総出で働き世話をするのは、John自身の「罪業の結果、災難と不幸の一部が全能者によって自国にもたらされたため」(PN 80)、それによる「破産が国家および私の家族を破滅に追い込んだ」(PN 80)からであった。そうした止むを得ない事情「にもかかわらず家族の愛は健在で、私を見捨てるのではなくFox医師の使用人として私のもとに現われに来てくれたのだ」(PN 80-1)と聖霊は答えた。

こうしてJohnは、聖霊の命によって、精神病院のスタッフの中に救済者としての家族という存在を必死に見出そうとした。とはいえそうすることで現実に救われることはなく、かえって自身の罪深さを再確認するだけであった。それだけではない。さらに深刻なことに、Fox医師を筆頭に精神病院のスタッフらは、実際は先述のような身体的拘束、監禁、嘲笑といった形で「まるで私の肉体、魂、精神が彼らの支配下にままと置かれ、いたずらと愚行のし放題であるかのように振舞った」(PN 120)。しかも、そうした振舞いは『健全な拘束』(“wholesome restraint”)あるいは『健全な補正・懲らしめ』

（“wholesome correction”）」（PN 6）と呼ばれ正当化された。こうした偽善的扱いは、「Fox 医師が故意に行っていたと考えるべきか、はたまた習慣的かつ非抑制的に、〔つまり〕自身がいかなる精神のもとにあるかわからずにベテンの振舞いをしていたと考えるべきか」（PN 207）、後年に至ってもなお John を悩ませ続ける種となった。

このように、最初の精神病院での生活もまた、ダブル・バインド的苦痛を再現するものとなった。それは、自身の恩知らずによる罪深さを「投影された救済者としての家族」との関わりを通じて再確認せざるを得ないと同時に、当の救済者であるはずの存在から暴力的かつ偽善的な扱いをされるというジレンマであった。

2-5. 実際の家族との関わり、そして精神錯乱からの脱却

だがこうしたダブル・バインド状態は、Bateson (1961: xiii) の言うように、John にとって単に困惑や苦痛の種であっただけでなく、明確な「怒り」と新たな「洞察」への足がかりともなっていた。しかもそれは、精神病院のスタッフや治療システムに対する怒りや洞察を超え、自身の実際の家族に対するそれへと至るものであった。〈投影的擬似家族〉に対する怒りは〈実際の家族〉に対するそれにまで敷衍され、そこから新たな、しかも精神錯乱からの脱却に貢献するほどの洞察が獲得されたのである。

自伝のタイトルが示すように、John の主たる執筆目的は、精神病院における治療システムの劣悪さを告発することにあつた。だが Bateson (1961: xvi-xix) も言うように、それとは別に、自身の実際の家族との関係性を真に明らかにすることもまた一つの執筆動機となっていた。PN には収録されていないが、自伝第二巻の序文には以下のように明記されている。

筆者自身の家族によって不幸にももたらされてしまった過ち (the errors which were unfortunately

committed by the author's own family) を彼ら [= 不当な形で精神病院に入れられるかもしれない人々] が回避できるよう、… [中略] … 自身が被った苦痛、〔その苦痛の〕訴え、困難を詳述し説明することで、錯乱状態に陥った人物をめぐる哀れでありながら情愛に満ちた関係 (wretched and affectionate relations) について語りたいと思う。(Perceval 1840: iii-iv)

「惨めでありながら情愛に満ちた関係」とは、文脈上、精神病院で出会った他の利用者らとの関係を指していると考えられる。John は、「著しい敬意の欠如」(PN 158) を感じさせ、「まるで子どものように扱われることへの驚きと嫌気を感じ」(PN 165) させるような暴力的で偽善的な扱いを共に受け続けた他の利用者らに対し、哀れみと情愛を抱きながら接した。そしてそこから彼は、精神病院のスタッフに対し、ぎこちなくも怒りを示すようになる (PN 139)。そしてこのぎこちない怒りは、上述のように「自身の家族によって不幸にももたらされてしまった過ち」に対する怒りにまで発展していく。「私の名誉に対する敬意の欠如」(PN 224) の感覚は「私の家族の卑しさ (indelicacy)」(PN 224) への怒りにまで敷衍されていくのである。

とりわけそれは母と長兄 Spencer に対して強く向けられた。そもそも長兄は John をプリズントンへ連れ、別れの挨拶も告げぬまま「見知らぬ人たちの中へ放り出」(PN 59) した張本人であった。John にとってこの「突然の出発は、私の側に何らかの抵抗がなされることを前もって恐れてのものであった」(PN 59)。Spencer は後にプリズントンを訪れるが、John に対しては「無思慮で軽薄な様子で、まるで子どもに話しかけるように」(PN 52) 接し、自身が置かれている状況を理解されたい、あるいは様々な意思を有していることを尊重されたいという願いは挫かれてしまったという (PN 52)。一方で、母とは手紙でのやり取りが主であった。John は手紙を通じて精神病院の過酷な状況を知らせるととも

に、そうした状況下に留め置いたことに対し怒りを表したが (PN 192-5)、母は、回復を願い再び家族と一緒に暮らせることを望みつつも、そうして母や兄を責めるといふ「病気による誤った見方」(PN 229)に苛まれているからこそ、今のような扱いをせねばならないのだと答えた。そして「私のかわいい子 (my dear child)」(PN 229)と呼びながらも、自身に対し親切かつ好感に満ちた態度を持てるようになるまで、これ以上、手紙を送らないでほしいと伝えた (PN 229)。

John は、このような偽善的扱いによって「私を見捨てたことによる家族の罪を許すことはできない」(PN 138)と、より明確な怒りを示し始める。その一方で、これら一連の偽善的扱いとその悲劇的結末への恐怖は、「幼少期 (boyhood)」—— John が言うには乳児期・幼児期・青年期——の頃を強制的に思い出させ、それとの「比較」によってさらなる苦痛をもたらすものでもあった。

これらすべての状況が自らの幼少期を強制的に思い出させるとともに、さらに私の心は、現在の状態と乳児期・幼児期・青年期との比較 (the comparison of my actual state with that of my infancy, childhood, and youth) を通じて、声にならないほどの激しい苦痛に苛まれることとなった。つまり、あれほど愛され、あるいは家族の愛の見せかけによってひどく騙され、そして最も悲運な中へとすっかり見捨てられることになったのだ (to have been so loved, or so duped by the appearance of my family's love, and to be so abandoned in the greatest woe) という苦痛な思いである。(PN 93)

John によると、家族は「かつてあれほど私に対し愛着を示していた」(PN 212)。だがそれ故に、「彼らは私に対し行ったことを受け止める (look upon) のに耐えられなかった」(PN 212)。ブリスリントンの精神病院から解放されたにもかかわらず、家族の元に帰りたいという望みが却下され、結局は別の

精神病院に送られることになったのも、家族が John の訴えによって自ら行ってきたことに直面してしまうのを避けるためであったと、John は考えたのである。

Bateson によると、John は激しい苦痛に苛まれながらもこうした一連の想起、洞察および怒りによって、逆説的ながら精神錯乱からの脱却を果たすことができたという。John は「長きにわたり聖霊によって欺かれたため、今ではそれが真実を語ったときも信用しなくなってしまった」(PN 146)。彼はこうして、非難と罪悪感を抱かせてきた幻聴に対しても徐々に疑惑を強めることができるようになり、後日、タイスハーストの精神病院へ移送された際には、ほとんど幻聴からは回復していたという (PN 292)。かくして「彼は、幻聴がまったくもって信頼できず、それが約束するものは実現されないことを発見し、さらには不愉快かつ矛盾した体験のすべてが、自身の発見に寄与するものであることを認める」(Bateson 1961: xv) に至った——。

Ⅲ 円環的システムを打ち破る直線的認識の契機

以上のように Bateson は、John Thomas Perceval という一人物が精神病性の徴候を呈した時期 (ロウ滞在時) から、本格的な精神錯乱期 (ダブリン〜ブリスリントン) を経て、寛解へと至る (タイスハースト移送時) までのおよそ3年間に焦点を当て、そのなかで、宗教的信念をめぐる疑念に端を発した幻聴、投影的疑似家族としての精神病院関係者からの暴力的扱い、そして実際の家族からの偽善的扱いといった複数の内的小および外的経験が複雑に絡み合う過程を追った。そして、これら複数の経験間に共通する精神的苦痛の本質として、ダブル・バインドと呼ぶに値する関係様式が伏在していることを分析的に明らかにした。それは同時に、John を通時的に取り巻いていた関係性ならびに存在論的危機を、円環的認識において捉えることの妥当性を一方では確かに示すものではあった。以下ではまず、この点に

ついて押さえておきたい。

3-1. 円環的に捉えられる通時的関係性と存在論的危機

本稿の冒頭で述べたように、ダブル・バインド理論を通じて捉えられるべき外傷状況というのは、時間的－空間的に限局化できる類のものではなく、長期に及ぶ通時的な現象としてのそれである。前者の観点に適うような最も象徴的なエピソードとしては、「父が暗殺された」という経験が挙げられよう。確かにこの衝撃的な出来事が、後年の精神錯乱にかななる影響も与えなかったとは言い難い。だが、この経験のみを限局的ないし断片的に取り出し、「父の死→精神錯乱」といった形で直線的な因果規則を想定するのは、John を取り巻いていた外傷的な関係様式の本質を捉えたことには全くならないし、さらには John という一人物をめぐる生活史を極度に矮小化してしまいかねない。それは他の個別エピソードでも同様である。「ロウでの出来事」「長兄との別れ」「精神病院での暴力」「母からの手紙」などという形で諸経験を断片化し、そのなかの一つを限局的な外傷要因と想定するようなことは、少なくとも John という個別具体的事象においては不適切なのである。Bateson のアプローチは、そうした断片化と限局化を避け、あくまで一生活史としての通時性に目を向ける試みであったと同時に、その中から、John を一貫して苦しめてきた内的及び外的双方にまたがる、すなわち、存在論的次元にまで食い込むほどの、「ダブル・バインド」と呼ぶにふさわしい相互作用の「形式的パターン」(TTS 202=290) を発見する試みであった。そして、その際に要請されるべき認識論的観点こそが、円環的認識なのであった⁴⁾。

とりわけそれは、兄や母との間のやり取りに如実に現れている。「ダブリンでの長兄との別れ」「プリズリントンでの長兄の振る舞い」そして「母からの手紙」は、外的経験としての「精神病院における疑似家族からの扱い」と内的経験としての「聖霊との

葛藤」ならびにそれらの構造的類似性を通じて、一定の通時的関係性の形式的本質を表すエピソードとして理解されねばならない。John はこれらのエピソードを経験するなかで、精神病性の振る舞いを示し、救済を訴え、そして最後は怒りを滲ませて抗議をしたのだが、こうした種々の能動的モメントは、相互行為関係を円環的システムとして構成する部分的要素と化してしまう。もっとも彼の怒りは、次に論じるように、最終的にはそうした関係的システム自体を打ち破るほどの洞察をもたらすこととなったが、しかしその段階に至るまでの彼は、こちらも本稿の冒頭で述べたように、能動的解釈過程の只中をさまよう状態にあったと考えられるのである。彼は、兄や母が、事実上、自らを精神病院に留めおこうとしながらも言語的振る舞いのうえでは「私のかわいい子」と呼び、再び一緒に暮らせることを望んでいると述べたことに対し、重ねて怒りを示しながらも、同時に強烈な罪悪感と自己非難に苛まれ続けた。それは以前から彼を内的に悩ませ続けた「恩知らずという罪」の幻聴に端を発していたが、ダブル・バインドの論点に引き付けて言うなら、“見捨てられて当然の存在だ”という自己規定を受け入れ切ることができず、“見捨てられまい”と抵抗するためにかえって、言語的水準では〈愛情〉メッセージを投げかける相手に対し怒りをもって反応してしまったことによる罪悪感の返礼と言えるものであった。こうして彼は、寄る辺なき円環的システムのなかで、怒りと罪悪感をめぐる再帰的悪循環——これ自体もまた円環的システムを成している——に苦しみ続けざるを得なかったのである。

3-2. 幼少期の想起による直線的認識の契機と円環的システムの打破

ところが John は、その寄る辺なき円環的システムから、再帰的悪循環から、最終的に抜け出した。彼はその内外にまたがる関係的システムを最終的には断ち切るに至ったのである。怒りと罪悪感が織りなしていた悪循環は、前者が後者を圧倒する形で

断ち切れ、それによって彼は精神錯乱からの脱却を果たしたのである。こうした結末こそが、Batesonの認識論的議論に対し批判的かつ発展的意義をもたらすものであったと筆者は考える。この点を次に明らかにしたい。

これまで述べてきたように、確かにJohnは、内外にまたがる円環的システムに苦しめられていた。だが彼は最終的に、その円環性という名の連続面に棒を差し、脱却に向けた不連続面を見出した。それは、ある種の直線的な認識を獲得ないし発見する内的過程ではなかったかと考えられる。その意味で、いわゆる直線的因果律から円環的認識への全面転換ではなく、後者が前者によって打破される契機をも含み込んだ、双方による複眼的な認識論的観点こそが必要となるのではないかと筆者は考えるのである。

Johnが果たしたと考えられる直線的認識の獲得には複数の契機がある。精神錯乱からの脱却に向けて最も直接的かつ決定的な契機となったのは、言うまでもなく、自身を苦しめてきた暴力の発現根拠として特定の人物とその特定の振る舞いを同定し、罪悪感をも超越する怒りを投げかけたという契機であろう。投影的擬似家族としての精神病院への怒りを媒介とした、母と長兄への明確な怒りがそれである。とはいえ彼は、突如としてこの決定的な契機へと到達したわけではない。注目すべきはそれに至るまでの想起と洞察の過程であり、そのなかで生じた直線的認識の契機である。

Johnは2-5で述べたように、寄る辺ない苦痛な状況のなかで、「幼少期」という〈かつて〉の環境を強制的に想起することとなり、そこで自らの生活史を〈かつて〉と〈現在〉という二つの比較対象へと分割する。つまりここで、自らの生活史上に時間的な不連続面を見出すこととなる。そのうえで彼は、〈かつて〉と〈現在〉が明確にコントラストを成すものであることを発見する。すなわち、〈あれほど愛されていたかつて〉と〈すっかり見捨てられることとなった現在〉という形で。こうした対比的な洞察を通じて彼は、“すっかり見捨てられることとなっ

た現在”という形での確定的な自己規定へと到達し切ることとなる。それは「声にならないほどの苦痛」を帯びた過程でありながらも、〈かつて〉を基点として〈現在〉の状況の意味を対比的に明確化し、それに向けて直線的な批判を展開するための必須の契機となったと言えよう。こうして〈現在〉を特微づけてきたダブル・バインドという形式的パターンは、その片方の構成要素、すなわち敵意的要素のみが“すっかりと私を見捨てた”という明確な事実認識によって前面に押し出され、もう片方の愛情的要素は、明確に欺瞞的なものと理解されることで後景へと退けられていく。それに伴い、愛情的振る舞いによって惹起されていた罪悪感も低減し、再帰的悪循環も解消されていく。さらには長期に亘って支配していた聖霊も、自身を欺いてきたものと明確に理解されることで、その影響力は衰えていく。

ここで見過ごしてはならないのは、こうした一連の想起と洞察の過程が、外部からの何らかの具体的な(治療的)介入によって促されたわけではないという事実である。やや文脈は異なるもののBatesonもその点について言及しており、「主として内発的(endogenous) プロセスによって進められた」「正常な世界への回帰によってのみ完成される発見への旅路」(Bateson 1961: xiv)と呼んでいる。さらには「全体のプロセスの最終的かつ必然的な結果」(Bateson 1961: xiv)とまで呼んでいる。もっとも彼は、そうした独力による自然寛解という結果を手放しに奨励しようとしているわけではなく、精神病性プロセスを経験している全ての人々が一律に目指すべきものだと言おうとしたわけでもない。あくまで「最終的かつ必然的な結果にすぎない」(Bateson 1961: xiv)というスタンスであり、あくまで積極的な関心が寄せられるべきなのは、「最終的な自然寛解への旅路に乗り出そうとした人々が陥る失敗」(Bateson 1961: xiv)にあるというスタンスを堅持している。とはいえ、そうした断りを重々踏まえたうえでなお、一連の想起と洞察の過程に関するBatesonの記述からは、ひとまず次のような結論

を導くことができるのではないかと考えられる。すなわち、彼は一連の想起と洞察の過程を、「ダブル・バインド」という一理論によって指示されるべき必然的プロセスの一部と理解していたのは間違いないのではないか。認識論的関心から言い換えると、直線的認識の獲得による脱却の可能性は、円環的認識への転換を必然としていたはずのダブル・バインド理論のなかに、はじめから内包されていたのではないか。あるいは現象学的観点から言うなら、ダブル・バインドに陥った主体がなし得る「発見」は、自身を苦しめてきた相互行為状況の円環性への発見のみならず、それを打破するものとして直線的認識を獲得・発見する過程までも、必然的に指示する契機と捉えられるのではないか。以上のような結論が導き出されるのである。

IV Bateson によるアプローチの独自性と 残された探究課題

以上のように筆者は、BatesonがJohnという人物の長大な語りと生活史にアプローチするなかで、後年の認識論的転換を真っ向から問い直させるような直線的認識の契機とその獲得の過程、ならびにその精神錯乱からの回復をもたらす効果について触れていたことを明らかにした。同じ時期、Batesonが「外傷」という表現を用いていたことも、この点と関連付けて理解されるべきではないかと思われる。すなわち、Johnを回復へと導いたのは、自らが長きに亘って留め置かれていた状況を「外傷的なもの」という形で最終的に受け止めさせ、確固たる直線的な怒りと批判を投げかけることが可能なものとして受け止めさせたその認識的契機であった、ということである。

こうした直線的認識の獲得に至るまでの一連の過程へのアプローチは、一方で、1-3で述べた、社会構成主義的な観点からもある程度は説明が可能ではないかと考えられる。確かにJohnは、身体的拘束や監禁によるあからさまに強圧的と感じられるよ

うな状況に置かれていたように見える。だがその暴力の本質は、Foucault（〔1961〕1972=1975）の議論とも通底するが、精神病院という（医学的）知と権力の結合による従順な身体への変容に向けた構成的かつ合理的な管理・支配体制であるという発想が、当の強圧的な扱いを正当化してしまっているという点にあったと言えるのではないか。「健全な拘束」などという表現がまさにそうした事態を言い表しているが、この点でダブル・バインドないしその円環性とは、暗黙の（メタ水準における）欺瞞的な知／権力による構成性とも不可分なものであると考えられよう。

だがその一方で、直線的認識の獲得による回復の契機については、社会構成主義に根差すナラティヴ・アプローチとは根本的に相容れないと思われる点がある。第一に、言を俟たないほど明白であるが、Johnの場合はセラピストとの会話を通じた協働的なドミナント・ストーリーの脱構築と新たな物語の再構成ではなく、Batesonも言うように、一貫してJohn個人による内発的な試みであったという点が挙げられる。Anderson & Goolishianは、ナラティヴ・アプローチによる治療場面において、対話的な観点の交差が「場合によっては独話的な観点（monological perspective）へと陥ってしまう」（Anderson & Goolishian 1988: 379=2013: 54）ことがあり、さらに「そうした独話的な観点では新たな意味が生まれてこなくなる」（Anderson & Goolishian 1988: 379=2013: 54）と述べている。ところがJohnの場合、まさに独話という形式、あるいは執筆という行為へと事後的に転化するような独話による内発的プロセスによって、自身のなかに埋没していた物語を発掘したのであった。これは、ナラティヴ・アプローチという文脈から見れば、語り（Narrative）が有する新たな発見の側面を提示するものではないかと筆者は考える⁵⁾。

しかしながら、次に述べる異質な点は、むしろBatesonの側に対しある重要な問題を投げかける。それは、Johnが内発的なプロセスによって獲得・

発見した回復への契機は、構成的な新たなストーリーの創生というよりも〈過去〉に埋没していたストーリーの想起であって、その意味では、むしろ古典的な精神分析療法による無意識の想起の範疇を超えるものとは言い難いのではないか、という問題である。既述のように、Bateson 自身も John の努力を (Freud 的な) 無意識的構造への解釈と洞察に準ずるものと捉えている部分がある (Bateson 1961: vi)。彼の理解に従うなら、「独話 (narrative)」という形式も、自由連想法などに象徴されるような精神分析的な言語化の過程に準ずるものと捉えたほうが自然であるかもしれない。

とはいえ、現今のナラティブ・アプローチ自体がそうした精神分析的技法を源流としている以上、いずれの学派ないしアプローチに最終的に包含すべきなのかという問題は、実はあくまで表面的な議論にすぎない。むしろ、より重要かつ筆者がさらに探究すべきなのは、John が想起するに至った〈過去〉に埋没していたストーリーが持つ、「存在論的次元」における重要性である。それ自体、再び脱構築される可能性のあるような構成的なストーリーとは違って、John が想起したストーリーは、内容的にも、そして想起に至った形式的プロセスを考慮しても、その存在論的次元に置かれた比重は極めて大きなもののように感じられるのである。これはさらに、Bateson がそもそも「自己」にとって望ましい存在論的基盤というものをどのように捉えているのか、という難問にまで発展する。現今のナラティブ・アプローチならびに社会構成主義が依拠するポストモダンの自己が自律的で確固たる基盤を持つ自己というアプリオリな主体像を否定する傾向にある一方で、John のケースからは、幼少期において揺るぎない存在論的基盤とともに確固たるものとして形成された人格的自己という、一種の近代理想的な主体像を素朴に感じ取ってやまない。またそうなれば、そのような存在論的基盤に支えられたアプリオリな自己への想起を、これまた素朴に、正常な世界への回帰に通ずる内発的プロセスの「必然的な結果」と捉え

ている Bateson においては、1-1 で述べたような存在論と認識論との関係性もまた、今一度問い直される余地があるように思われる。というのも、確固たる存在論的基盤に支えられた自己が想起され、さらにそこから「怒り」という極めて強力な情動作用が直線的な契機の原動力となったという事実を鑑みるならば、——少なくとも John のような経験世界にアプローチする際には——存在論と認識論との連動性よりもむしろ、認識論に対する存在論のある種の「優位性」ないし「先行性」というものが前提とされる必要があるように考えられるからである。野村直樹 (2018) のように、Bateson およびダブル・バインド理論は今や、ナラティブ・アプローチのような脱近代科学的なポストモダンの対話理論の草分け的存在として位置付ける傾向が一般的であるが、上記のような存在論的次元をめぐる筆者の考えは、そうした一般的理解に対しても一石を投じるものとなるのではないかと思われる。

とはいえ、以上の問題を明らかにするには、まず、Bateson が認識論的議論とは別に、上記の問題に取り組めるだけの充実した存在論的議論を残していたかどうかを、今一度、全ての思索を通じて追究していく必要がある。加えて、John に目を向けると、彼がそもそも自らの存在論的危機から真に抜け出せたと言える状態であったかどうか、今一度、彼の長大な語りを通じて詳細に検討する必要がある。これらは今後の探究課題として引き取りたい。

注

- 1) なお、相互行為関係をめぐるとした認識論的転換は、先に述べた、時間的-空間的な限局化を避け通時的な現象として捉えようとする立場と軌を一にしている。というのも、「物象化 (reification)」(Bateson [1969a] 2000: 272=2000: 373) とも称されるように、時間的-空間的な限局化は擬似物理学的な発想に基づく (一過的な) 物理的-身体的損傷のイメージを有しており、まさしくそれは外傷状況を一方通行的な暴力図式として捉えようとする直線的認識にも通底する発想だからである。

したがって、本論にある直線的因果律から円環的認識への転換は、こうした擬似物理学的発想からの脱却という狙いと軌を一にするものと考えられるのである。

- 2) いくつか紹介すると、まず、権力および権力関係とその言語（ディスコース）的表現のあり方に関心を寄せるポスト構造主義、ならびにそのナラティヴ・アプローチへの影響力について概略的に論じている最近の論文としては、V. Dickerson (2014) などが挙げられる。また、ポストモダン状況におけるセラピストの権力と社会正義のあり方、ならびにそれらと多様性という観点との結びつき方について質的に明らかにしたものと、J. D'Arrigo-Patrick et al. (2017) の研究が挙げられる。彼らは11人の現役セラピストにインタビューを実施し、「対立 (countering) を通じたアクティビズム」と「協働性 (collaborating) を通じたアクティビズム」に分けたうえで、前者の立場を好んでとる者は、クライアントのアイデンティティや関係的ダイナミクスに対し否定的に作用していると思われる社会政治的・社会文化的コンテクストへと直接的に挑み、圧迫的で軽蔑的なディスコースと考えられるものを破壊し、クライアントの批判的意識を向上させることを重要な責務と捉え、それに向けて自らの権力を行使することが倫理的責任と捉えている一方で、後者の立場を好んでとる者は、そうした社会教育的かつ意識向上的な観点をむしろ避けることによって支配的な実践へと挑戦しようとしており、クライアントの問題の起源を明確に定位するべく自らの権力を行使することに慎重である姿勢こそが、倫理的に要請されると考える傾向にあったと述べている。他には、L. De Haene (2010) は、ナラティヴ・アプローチに代表されるポストモダンの実践において「質的な調査」（すなわち問題状況の「記述」）と「治療」（すなわち問題状況への具体的な「介入」）とが厳然と区別されつつある現状に触れ、ポストモダンの認識論それ自体が、本質的にはこうした二元論が解消されるフォーカル・ポイントであると述べつつも、結語部分では、「現実の生活実践における介入と記述を理解するにあたって、Bateson のいう直線的な変化ないし中立的観察と

いった認識論的誤謬を回避することが不可能であるということに、我々はポストモダニズムの限界を見出すのかもしれない」（De Haene 2010: 9）

という興味深い一文を記している。この一文は、本稿の結論部分とも通底する内容である。

- 3) これは、ダブル・バインド理論が元々、〈演繹〉的思考に基づいて導かれたものであるため、一般には抽象度の高い仮説として受け止められてきたことが背景にあると考えられる。周知のように Bateson は「論理階梯 (Logical Types)」ならびにそこから派生した「論理的パラドックス」という既存の形式論理的命題に重点を置きつつ、あらゆる発話的メッセージにはその字義通りの意味を伝える「指示的水準」(Bateson [1955] 2000: 178 = 2000: 259) と、外部との「関係」それ自体の性質を規定し暗黙裡に伝達する「メタ・メッセージ的水準」が例外なく含まれ、さらにそこから、双方の意味する内容が矛盾したり葛藤を引き起こしたりするケースもありうることを、そしてそれがユーモアや遊戯といったレベルを超え、しばしば相手を精神錯乱に陥れる可能性もありうることを論理的に導き出そうとした。これがダブル・バインド理論の骨格となる推論的アイデアであった。
- だが、このように演繹的思考に留まるだけでは抽象的な論理的説明の域を出ず、外傷理論としての経験的リアリティを訴えるには限界がある。『パーシヴァルの語り』という経験世界へとアプローチを試みたのは、推論方法をめぐるといった事情が背景にあったのではないかと筆者は推察している。
- 4) 注3で述べたように、Bateson が『パーシヴァルの語り』という経験世界へのアプローチを試みた背景には、演繹的思考に留まらない経験的リアリティを見出すという狙いがあったと考えられる。とはいえ、そのなかで採用された推論方法は〈アブダクション〉と呼ばれる独特のものであり、〈帰納〉的思考とは一線を画す方法であったと筆者は捉えている。

一般に帰納は、複数の観察事例を前提に据え、そこからある共通点を発見し普遍的規則を推論する方法を指す。一般にこの推論方法の難点と言えば、導き出される結論を普遍化する際に伴う不確

実性や、経験的観察レベルから理論的抽象レベルへの移行の困難さといった点が挙げられるが、しかし Bateson はそれらに留まらず、この方法ないし思考が、I. Newton 以降 Freud 登場に至る19世紀後半までに確立された自然科学的な経験世界へのアプローチ、すなわち、経験的に得られた精神-身体的観察データから擬似物理学的発想に基づく因果(病因)説明の妥当性を導こうとする態度を背景に発展してきたと捉え (Bateson [1972] 2000: xxviii-xxix = 2000: 27-8), こうした思想的背景が、ある特定の支配的説明原理そのものを問い直し、別の形式的議論に基づく経験世界の認識論を打ち立てることを長年に亘って阻害してきたのだという。つまり、「衝撃」「エネルギー」などといった概念に象徴される擬似物理学的発想に基づく因果(病因)説明とそれに当てはまるようあらかじめ密かに物象化=限局化された経験世界を帰納的に想定するようなアプローチが、時間的-空間的な通時性を重視した相互行為関係の形式的パターンへの追究を長年に亘って阻害してきたというのである。

John のケースに引き付けて言うと、「父が殺された」というエピソードなどは特に、このような帰納的思考に適うものと言えよう。だが、この経験のみを限局的に取り出し、直線的な因果規則を推論し、そこから他の事例との横断性を見出そうとするのは、本論でも述べたように John という一人物をめぐる生活史を極度に矮小化する行為であり、厳に避けなければならないのである。

一方でアブダクションとは、哲学者 C. S. Peirce が用いた帰納、演繹に並ぶ第三の推論方法であり、事前に何らかの理論的・概念的規則や構造を分析枠組みに据え、その内部で、相互関連性が不明なままであった個別事象を解釈し直すことで、新たな枠組みの中で再文脈化する方法である。たとえば、ある物質的対象としての建築物を「権力構造」という分析枠組みの中で解釈し再文脈化するといった (Danermark, B. et al. 2002: 88 = 2015: 134), 帰納と同様に「経験的事実の世界に関する知識や情報を拡張するために用いられる」(米盛裕二 2007: 33) 推論方法である。Bateson がこの方法について言及するのは晩年近くの1970年代後

半以降であるが (Bateson 1976: xii, 1978: 41), 筆者は John に対するアプローチもまた、先立ってアブダクション的な性格を兼ね備えたものであると考えている。理由は次の二点である。

第一に、John が当初目指していた語り(自伝)の主目的を超え、「ダブル・バインド理論」という新たな理論的規則の内部で再解釈・再文脈化しようとした点が挙げられる。John の主目的は、あくまで精神病院における暴力的治療を告発することにあり、それは Porter (1987: 167 = 1993: 271-2) の言うように、当時のイギリスにおける私立精神病院が「狂気の商売」として国内市場経済を主導していたこと、そしてその弊害として医療行為からは程遠い暴力的処遇の温床となり得たことを生々しく示すものであった。だが Bateson が真に目指そうとしたのは、そうした John 自身が掲げた主題を超えた、背後に伏在するより抽象度の高い暴力の形式を見出すことにあった。その目的を果たすために理論的規則として事前に据えられたのが、ダブル・バインド理論であったのである。

続いて第二に、アブダクション的アプローチが、単に事前に提示された理論的規則ないし認識論的前提を個別事象に適用させるだけに留まらず、Danermark et al. (2002: 94-5 = 2015: 143-4) の言うように、「個別事象の側が理論的規則や認識論的前提に対し何を新たに語るのか」といった逆向きの問いをも明らかにせねばならない推論方法であるという点も、理由の一つとして挙げられる。つまり、「アブダクションによって導かれた研究実践では、事象の理論的〔・認識論的〕再記述と、事象に基づいた理論的〔・認識論的〕発展との間の相互作用(弁証法)が決定的に重要なのである」(Danermark et al. 2002: 95 = 2015: 144) ということなのだが、まさしくそれは、Bateson 自身が掲げた認識論的転換という前提に対し、John という個別事象がいかなる批判的かつ発展的意義をもたらすものであるのかを明らかにするといった、本稿の主たる研究課題と通底する点であると言えよう。具体的にいかなる批判的かつ発展的意義が見出されるかについては、本論の3-2で論じている。

以上のような、アブダクションという推論方法から Bateson によるアプローチをどのように評価するかという問題については、改めて別稿にて明らかにしたい。

- 5) またこの点は、ダブル・バインド理論の既存の理解をある意味で押し広げるものでもある。周知のように Bateson は、1956年の段階で既に、ダブル・バインド理論の治療への応用可能性について言及していた。いわゆる「治療的ダブル・バインド (therapeutic double bind)」（TTS 226=317）と呼ばれるものであるが、しかしあくまでそれは、ダブル・バインド理論のパラドキシカルな原理を逆利用した第三者による外的介入を想定するものであった。1956年の論文以降、こうした外的介入を要する治療的側面にのみ光が当てられてきたのだが、本論で示したように、ダブル・バインド理論はその後、内発的プロセスとしての自己治療（自己寛解）の可能性をも内包することとなった。この点について、これまでに専門的に論じられたことは管見の限り皆無に等しい。

文献（日本語訳のある外国語文献に関しては、引用の際、適宜訳文を修正した）

- Anderson, H. & Goolishian, H. A., 1988, "Human Systems as Linguistic Systems: Preliminary and Evolving Ideas about the Implications for Clinical Theory," *Family Process*, 27(4): 371-93. (=2013, 野村直樹 [訳], 「言語システムとしてのヒューマンシステム——臨床理論発展に向けてのいくつかの理念」『協働するナラティブ』遠見書房, 27-100.)
- , 1990, "Beyond Cybernetics: Comments on Atkinson and Heath's "Further Thoughts on Second-Order Family Therapy,"" *Family Process*, 29(2): 157-63.
- 浅野智彦, 1996, 「家族療法における権力問題」『東京学芸大学紀要 第3部門 社会科学』47: 101-10.
- , 2001, 『自己への物語論的接近——家族療法から社会学へ』勁草書房.
- Bateson, G., 1955, "A Theory of Play and Fantasy: A Report on Theoretical Aspects of the Project of Study of the Role of the Paradoxes of

Abstraction in Communication," *Psychiatric Research Reports*, 2: 39-51, reprinted in: [1972] 2000, *Steps to an Ecology of Mind (University of Chicago Press ed.)*, Chicago: University of Chicago Press, 177-93. (=2000, 佐藤良明 [訳], 「遊びと空想の理論」『精神の生態学 (改訂第2版)』新思索社, 258-79.)

- , 1959, "Cultural Problems Posed by a Study of Schizophrenic Process," Auerback, A. (ed.), *Schizophrenia: An Integrated Approach*, New York: Ronald Press Company, 125-46.
- , 1960, "Minimal Requirements for a Theory of Schizophrenia," *A.M.A. Archives of General Psychiatry*, 2: 477-91, reprinted in: [1972] 2000, *Steps to an Ecology of Mind (University of Chicago Press ed.)*, Chicago: University of Chicago Press, 244-70. (=2000, 佐藤良明 [訳], 「精神分裂症の理論に必要な最低限のこと」『精神の生態学 (改訂第2版)』新思索社, 340-71.)
- , 1961, "Introduction," Bateson, G. (ed.), *Perceval's Narrative: A Patient's Account of His Psychosis, 1830-1832*, California: Stanford University Press, v-xxii.
- , 1966, "Slippery Theories," *International Journal of Psychiatry*, 2: 415-7.
- , 1969a, "Double Bind, 1969," paper presented at a symposium on the Double Bind, American Psychological Association, Washington DC, August 1969, reprinted in: [1972] 2000, *Steps to an Ecology of Mind (University of Chicago Press ed.)*, Chicago: University of Chicago Press, 271-8. (=2000, 佐藤良明 [訳], 「ダブルバインド, 1969」『精神の生態学 (改訂第2版)』新思索社, 372-81.)
- , 1969b, "Pathologies of Epistemology," paper presented at the Second Conference on Mental Health in Asia and the Pacific, East-West Center, Hawaii, 1969, reprinted in: [1972] 2000, *Steps to an Ecology of Mind (University of Chicago Press ed.)*, Chicago: University of Chicago Press, 486-95. (=2000, 佐藤良明 [訳], 「エピステモロジーの正気と狂気」『精神の生態学 (改訂第2版)』

- 新思索社, 633-45.)
- , 1971a, “A Systems Approach,” *International Journal of Psychiatry*, 9: 242-4.
- , 1971b, “The Cybernetics of “Self”: A Theory of Alcoholism,” *Psychiatry*, 34(1): 1-18, reprinted in: [1972] 2000, *Steps to an Ecology of Mind (University of Chicago Press ed.)*, Chicago: University of Chicago Press, 309-37. (=2000, 佐藤良明 [訳], 『『自己』なるもののサイバネティックス——アルコール依存症の理論』『精神の生態学 (改訂第2版)』新思索社, 420-55.)
- , [1972] 2000, “Introduction: The Science of Mind and Order,” *Steps to an Ecology of Mind (University of Chicago Press ed.)*, Chicago: University of Chicago Press, xxiii-xxxii. (=2000, 佐藤良明 [訳], 「序章 精神と秩序の科学」『精神の生態学 (改訂第2版)』新思索社, 20-33.)
- , 1976, “Foreword: A Formal Approach to Explicit, Implicit, and Embodied Ideas and to Their Forms of Interaction,” Sluzki, C. E. & Ransom, D. C. (eds.), *Double Bind: The Foundation of the Communicational Approach to the Family*, New York: Grune & Stratton, xi-xvi.
- , 1978, “The Double Bind Theory — Misunderstood?,” *Psychiatric News*, 13: 40-1.
- , 1979, *Mind and Nature: A Necessary Unity*, New York: E. P. Dutton. (=2006, 佐藤良明 [訳], 『精神と自然——生きた世界の認識論 (改訂版)』新思索社.)
- Bateson, G. (ed.), 1961, *Perceval's Narrative: A Patient's Account of His Psychosis, 1830-1832*, California: Stanford University Press.
- Bateson, G., Jackson, D. D., Haley, J. & Weakland, J., 1956, “Toward a Theory of Schizophrenia,” *Behavioral Science*, 1(4): 251-64, reprinted in: [1972] 2000, *Steps to an Ecology of Mind (University of Chicago Press ed.)*, Chicago: University of Chicago Press, 201-27. (=2000, 佐藤良明 [訳], 「精神分裂症の理論化に向けて」『精神の生態学 (改訂第2版)』新思索社, 288-319.)
- Danermark, B., Ekström, M., Jakobsen, L. & Karlsson, J. C., 2002, *Explaining Society: Critical Realism in the Social Sciences*, London: Routledge. (=2015, 佐藤春吉 [監訳], 『社会を説明する——批判的实在論による社会科学論』ナカニシヤ出版.)
- D'Arrigo-Patrick, J., Hoff, C., Knudson-Martin, C. & Tuttle, A., 2017, “Navigating Critical Theory and Postmodernism: Social Justice and Therapist Power in Family Therapy,” *Family Process*, 56(3): 574-88.
- De Haene, L., 2010, “Beyond Division: Convergences between Postmodern Qualitative Research and Family Therapy,” *Journal of Marital and Family Therapy*, 36(1): 1-12.
- Dell, P., 1986, “In Defense of “Lineal Causality”,” *Family Process*, 25(4): 513-21.
- , 1989, “Violence and the Systemic View: The Problem of Power,” *Family Process*, 28(1): 1-14.
- Dickerson, V., 2014, “The Advance of Poststructuralism and its Influence on Family Therapy,” *Family Process*, 53(3): 401-14.
- Foucault, M., [1961] 1972, *Histoire de la folie à l'âge classique*, Paris: Gallimard. (=1975, 田村俊 [訳], 『狂気の歴史——古典主義時代における』新潮社.)
- 藤本美貴, 2013, 「心的外傷理論としてのダブル・バインドの再構成——『自己-確証』と『抽象性』をキーワードとして」『立命館産業社会論集』49(2): 105-17.
- , 2014, 「心的外傷研究をめぐる新たな認識的問題——DSM-5に至るまでの概念史的追究を通じて」『立命館産業社会論集』50(3): 129-43.
- 長谷正人, 1989, 「ダブル・バインドへのシステム論的アプローチ」『社会学評論』40(3): 310-24.
- Herman, J. L., 1992, *Trauma and Recovery: The Aftermath of Violence — From Domestic Abuse to Political Terror*, New York: Basic Books. (=1999, 中井久夫 [訳], 『心的外傷と回復 (増補版)』みすず書房.)
- Hoffman, L., 1981, *Foundations of Family Therapy: A Conceptual Framework for Systems Change*, New York: Basic Books. (=2006, 亀口憲治 [訳], 『家族療法の基礎理論——創始者と主要なアプロ

- チ』朝日出版社。)
- Lorenzer, A., 1977, „Antagonistische Interaktionsformen beim »Double-bind«,“ *Sprachspiel und Interaktionsformen: Vorträge und Aufsätze zu Psychoanalyse, Sprache und Praxis*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 58-74.
- 野村直樹, 2018, 「ダブルバインド理論がもたらしたもの」『精神科治療学』33(2): 219-24.
- Perceval, J. T., 1840, *A Narrative of the Treatment Experienced by a Gentleman, During a State of Mental Derangement; Designed to Explain the Causes and the Nature of Insanity, and to Expose the Injudicious Conduct Pursued towards Many Unfortunate Sufferers under that Calamity*, London: Effingham Wilson.
- Porter, R., 1987, *A Social History of Madness: Stories of the Insane*, London: Weidenfeld & Nicolson. (=1993. 目羅公和 [訳], 『狂気の社会史——狂人たちの物語』法政大学出版局。)
- Sutherland, O., Fine, M. & Ashbourne, L., 2013, “Core Competencies in Social Constructionist Supervision?,” *Journal of Marital and Family Therapy*, 39(3): 373-87.
- White, M. & Epston, D., 1990, *Narrative Means to Therapeutic Ends*, New York: W. W. Norton. (= 2017, 小森康永 [訳], 『物語としての家族（新訳版）』金剛出版。)
- 米盛裕二, 2007, 『アブダクション——仮説と発見の論理』勁草書房。

A Life-Historical Analysis and Its Epistemological Emphasis
in Double Bind Theory :
On the Endogenous Moments of Linear Epistemology in the ‘Narrative’
of One Person Who Suffered from a Psychosis

FUJIMOTO Yoshitakaⁱ

Abstract : After proposing the ‘Double Bind Theory’ in 1956, G. Bateson expressly developed an important epistemological argument in around 1970. It dealt with, as is well known, the necessity of changing from ‘Linear Causality’ to ‘Circular Epistemology’ in order to understand interpersonal relations; specifically, Bateson insisted on the necessity of rejecting simple one-way causality as seen in orthodox concepts of ‘Psychological Trauma,’ and of understanding interpersonal relations as a kind of systematic circular construction in which each person behaviorally drives the other. This ‘Epistemological Change,’ that is also applicable to some destructive and recursive effects of ontological, internal and constant self-constitution, was subsequently largely accepted within fields of family therapy. But on the other hand, while developing his epistemological argument, Bateson accomplished another interesting work; one that should be called a longitudinal life-historical analysis on the ‘Narrative’ of one person who suffered from a psychosis. In this analysis, the author finds, as a critical and developmental emphasis in Bateson’s own epistemological argument (Epistemological Change), the endogenous moments of Linear Epistemology and the process that these moments broke through some circular pathological systems.

Keywords : Bateson, double bind theory, psychological trauma, epistemological change, ontology, life-history, narrative approach, Perceval’s Narrative

ⁱ Visiting Researcher, The Kinugasa Research Organization, Ritsumeikan University